

I 研究 構 想

1 研究主題

食への関心を高め、健康的な食生活をめざす子どもの育成
～地域の「ひと・もの・こと」とのつながりや関わりを通して～

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

近年、ライフスタイルや価値観の多様化、食生活の欧米化により、子どもの食生活は変化している。家庭生活では、共働きや放課後の習い事の増加など、食事をとりまく環境も多様化している。また、食事作りの時間を短縮するために、調理済の食事を利用する家庭が増えている。このような現状において、子どもの食生活について学校・家庭・地域が連携して、望ましい食習慣の育成に努める必要がある。

本市の「子どもの未来をひらく教育プラン（教育振興基本計画）」の「SDGsの視点を踏まえた学校や地域の特色等をとらえた実践」では、学校全体で食育を推進する体制を整備し、組織的に食育に取り組むことが推進されている。地域の生産者や食文化、歴史などをテーマにした授業実践をすることで、地産地消への理解や食への感謝の心、シビックプライドの醸成が図られる。それは、これから子どもが生涯にわたって自分や社会のために食生活を見直し、健康的な食生活を実践していこうとする態度の育成につながる。また、生活科・総合的な学習の時間において、具体的に学び続け、自ら能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりしながら身近な社会である地域とのつながりや関わりを深めることは、意義深いと考え、本主題を設定した。

(2) 本校の教育目標から

本校では「豊かな人間性と健やかな体を持ち、新しい時代をたくましく生きる子どもの育成」という教育目標を掲げ、目指す児童像に次の3点を挙げている。

- よく考え学ぶ子ども（確かな学力）
- 心豊かで思いやりのある子ども（豊かな心）
- 元気でたくましい子ども（健やかな体）

本研究の食への関心を高め、健康的な食生活をめざすことが、心身ともに健やかに、新しい時代をたくましく生きる子どもの育成にもつながると考える。

(3) 子どもの実態から

本校の児童は明るく素直で、元気のよい児童が多く、給食については残食も少ない。日々の残食率は全体としては月平均約1%である。どの学年も残食はほとんどない。

また、本校は令和元年度に隣接する伊川小学校と統合し、新たなスタートをきった。それまでは、農園での野菜作りやコメ作りなど、お互い小規模校の特性を生かしながら地域と連

携した様々な取り組みを行ってきた。しかし、当初のアンケート調査の結果から、児童は地元北九州市やその周辺でとれる野菜や食材に、あまり興味を持っていないことが明らかになった。

3 主題の意味

(1) 主題について

食への関心を高めるとは、日々の食生活を通してたくさんの食材にふれ、生産、流通、消費（栄養）など自分たちの周りにある食に対して興味を持つことである。

健康的な食生活をめざすとは、生活科においては、食事に関する習慣や技能を身に付けることで規則正しく健康に気を付けて生活することである。自分で野菜を育て、食べる活動などを通して、食の安全や命の大切さについて考えることで、食に関する理解をより身近に実感をもって深めることができる。総合的な学習の時間においては、児童が食について探究的なものの見方、考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、将来に向けた健康的な食生活について考える資質・能力を育成していく。

(2) 副主題について

「地域とつながる」の地域の対象としては、友達や出会う様々な人、社会、特に身近な地域などがあり、地域の対象から子ども達が見方、考え方を広げていく。つながりや関わりの豊かさとは、身近な地域の「ひと・もの・こと」との目的をもった関わりの中で生まれる人間関係形成能力、愛着の深まりや信頼関係の深さ、絆の強さのことである。

自分を取り巻く身近な地域の人や社会・自然などの学習対象に、子どものやる気・本気・根気を引き出しながら、繰り返し主体的に働きかけていく中で、子ども達は「もっと関わりたい」という意欲や「つながっている」という絆を実感していく。

つながりを豊かに創り出せば、子どもが地域の課題解決のために地域の人と協働して解決していく過程で対象への見方・考え方を深め、新しい考えを生み出すとともに、人間関係を広げたり、深めたりして信頼関係を築き、自分の成長に気付いたり、地域の一員としての自覚を持ったりすることができる。また、地域に親しみや愛着をもち進んで関わろうとすることで、自分自身の生活をふり返り、自己の生き方を創り出そうとする意欲を高めることができる。「自分の生活を見つめ直す」とともに、「将来に向けての自己の生き方」を創っていく子どもを育てたいと考える。

4 めざす子どもの姿

「食に関する指導の全体計画」にもとづいて、生活科・総合的な学習の時間の学習を進めていく。そこで、生活科・総合的な学習の時間では、以下の「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の3つの資質や能力を育んでいきたい。

3つの資質・能力	具体的な子どもの姿
知識・技能	・身近な地域の「ひと・もの・こと」との出会いから、主体的に課題を見付け、本気で課題を解決しようとする意欲をもち、解決

	<p>のための方法や手順を身に付けることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集めた情報から、新たな考えを形成することができる。
<p>思考力・判断力・ 表現力</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・集めた情報をもとに自分の考えを創り出し、粘り強く友達と調べたり、試したり、話し合ったりして考えを深め、表現することができる。
<p>学びに向かう力・ 人間性等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と協働しながら調べたことや発見したことを基に考えを深め、さらに問いを見出したり、学習を通しての自分自身の成長やこれからの地域との関わりや自分の生活について考えたりすることができる。

これらの力が育まれるように、地域素材の教材化を図っていく。

5 研究内容

(1) 研究の目標

食への関心を高め、健康的な食生活をめざす子どもの育成するために、地域の「ひと・もの・こと」とのつながりや関わりを重視した、食に関する生活科・総合的な学習の時間の授業づくりを行う。

(2) 研究仮説

食に関する生活科・総合的な学習の時間において、次のような三つの手立てを行えば、食への関心を高め、健康的な食生活をめざす子どもを育てることができるであろう。

- ① つながりや関わりを豊かに創り出す子どもを育む条件を備えた地域素材の教材化
- ② 地域の「ひと・もの・こと」とのつながりや関わりを大切に学習過程の工夫
- ③ 気づきの質やものの見方、考え方を高め、学びの深まりを実感するための話し合い活動の工夫

(3) 仮説検証のための手立て

手立て1 つながりや関わりを豊かに創り出す子どもを育む条件を備えた地域素材の教材化

子どもが地域の課題解決のために地域の人と協働する過程で対象への見方・考え方を深め、新しい考えを生み出す単元構成を考える。学習を進めていく中で、人間関係を広げたり、深めたりして地域の人と信頼関係を築き、地域の一員として今後も関わり続けることができるであろう。地域素材を使った学習活動を通して自分自身の食生活をふり返り、健康的な食生活をめざし、食への関心を一層高めることができると考える。

そこで、生活科・総合的な学習の時間の実践では、価値性、追究性、協働性の3つの視点がある地域素材の教材化を図っていく。

条件	具体的な内容
価値性	子どもたちの「調べてみたい」「やってみたい」というやる気を引き出せる魅力をもち、生活科でいう学習内容、総合的な学習の時間の指導事項を満

	たすことができること。一つの対象から、次々と学習活動が展開し、学習の深まりを生むことができること。
追究性	身近な存在で「ひと・もの・こと」に何度も繰り返し関わることができること。多様な情報を得ることができ、本気で子どもたちが多角的にとらえたり、整理分析したりできること。
協働性	課題解決に向けた他者との協働を通して、積極的に社会のために自分ができることを本気で考えたり、根気よく実行したり、自分のよさや可能性に気づき自分の生き方につなげたりできること。

地域素材を教材化した、各学年の単元構成は以下の通りである。

学年	単元名	ひと	もの・こと
1年	生活科 「たのしい あき いっぱい」	「ふれあい農園」の地域の人・本校校務員・家庭	「ふれあい農園」校内のいも畑
2年	生活科 「大きくなあれ わたしのやさしいⅡ」	「ふれあい農園」の地域の人・本校校務員・給食の調理士・家庭	「ふれあい農園」校内の畑
3年	総合的な学習の時間 「松北給食たんけん隊2」	大葉春菊の生産者 栄養教諭	大葉春菊生産の見学
4年	総合的な学習の時間 「猿喰新田のよさを伝えよう～われら猿喰新田伝え隊」	猿喰新田ブランドに関わる地域の人・栄養教諭	猿喰新田の見学 猿喰ブランド商品に関わる作業
5年	総合的な学習の時間 「米プロジェクト～米の未来を考えよう～」	栄養教諭 地域の農家の人	地域の農家の方へのインタビュー
6年	総合的な学習の時間 「12歳の力で～「食」×SDGs グルメにチャレンジ～」	栄養教諭	疑似的なレストランでのバイキング 健康的な食生活を考えたメニュー

また、各学年の成長過程を踏まえ、「食に関する指導の全体計画」にもとづいて、6年間を通して食に関する指導を段階的、継続的に指導することができる生活科・総合的な時間の学習の「松北カリキュラムプラン」の授業実践を行っていく。

手立て2 地域の「ひと・もの・こと」とのつながりや関わりを大切に単元構成の工夫

本研究における具体的な「ひと・もの・こと」を次のように捉える。

- 「ひと」とは、家族、学校で関わる人、農家や施設などで働く人など、身近な食に関する人的な環境のこと。
- 「もの」とは、身の回りの田や畑、草花、山、川などの自然、生き物、野菜などの植物、施設や設備など、身近な食に関する物的な環境のこと。
- 「こと」とは、各教科、給食の時間、栽培活動、地場産物に触れる活動など、校内の教育活動における食に関する行事的・文化的な環境のこと。

生活科や総合的な学習の時間の中で、「ひと・もの・こと」（対象）とのつながりや関わりを大切に学習過程を工夫して行っていく。

学習過程では「であう」⇒「さぐる」⇒「ふりかえる」活動の設定を、単元の中で繰り返し設定していく。そのことにより、児童の思考がスパイラル上に伸び、探究心を高め、次への課題を見いだすことができると考える。

「であう」場面では、児童が対象への関心を高め学習課題を設定する「動機付け」を行う。「さぐる」場面では、児童が対象に関わることで新たな見方や考え方に気づいたり、課題解決に向けて多面的な価値ある見方や考え方をつくったりする「意義付け」を行う。「ふりかえる」場面では、対象のよさや見方、考え方のよさを明らかにしていく「価値付け」を行う。

手立て3 気づきの質やものの見方、考え方を高め、学びの深まりを実感するための話し合い活動の工夫

児童が主体的に課題解決を目指すために、話し合い活動の充実を図りたい。その際に自分の考えや友達の考えを表現することができる「思考ツール」を各学年の実態に合った活用をしていく。

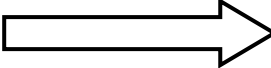

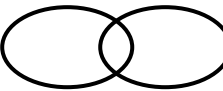
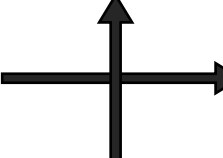
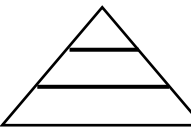
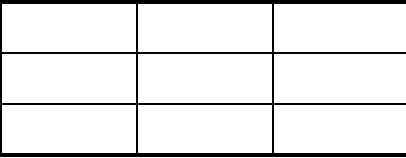
「思考ツール」は児童の課題解決の流れに即して、また働かせたい思考内容に応じて効果的に位置づけるようにする。話し合い活動が充実すれば、自分の考えや思いに自信をもって表現できるようになると考える。さらに気づきやものの見方・考え方を高めることをねらいとする。

また、思考ツールなどの使用による話し合い活動の充実は学力向上に深く関わると考える。各学年において今年度も様々な思考ツールなどを用いながら話し合い活動の充実を図っていききたい。

思考ツールを活用する効果として、以下のことが考えられる。

- 多種多様な情報がある観点をもとにまとめることができる。
- 多種多様な情報どうしの結びつきが明確にすることができる。
- 個々の頭の中にあるイメージや情報を視覚的にとらえることができる。

思考ツールには、例えば下のようなものがある。これを子どもたちの問題解決の流れに即して、また、働かせたい思考内容に応じて効果的に位置づけるようにする。

	思考ツール	促進される思考
矢印		関連付け（順序，因果）
囲み		比較・分類
ベン図		比較・分類
座標軸		位置づけ
ピラミッドチャート		焦点化 序列化
マトリックス		比較・分類 多面

振り返り活動では「①学習前と本時の自分の比較」「②次時への見直しと期待感」の二つの視点をもって行う。新しく学んだことを自分の食生活にどう生かしていくか、これからの自分の食生活についてどのような取組ができるかなど、自分自身を振り返ることで、一層食への関心が高まり、健康的な食生活について児童は主体的に考え、実践することができるであろう。振り返りの方法は「学習カード」や「発言」などである。

(4) 研究組織図

主題推進委員

1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年
外尾	能見 河野	武藤	川上	竹島	廣石	島田 永末 横内 坂下

各研修部 ◎研究主任

生活科研究部	◎外尾 能見 河野
総合的な学習の時間研究部	◎廣石 武藤 川上 竹島 島田
食育研究部	◎永末 横内 坂下

(5) 研究構想図

